

市原佐都子

Q

キネ

ローマシアター京都 レパートリー作品

分裂する

増殖する

おぼろげ

なにがリアルか、
それとも虚構か？

SPECIAL Interview

市原 佐都子



Artist Photo ©Bea Borgers / Stage Photo ©Toshiaki Nakatani

北九州市出身の劇作家・演出家、市原佐都子作品が、自身が演劇に触れるきっかけにもなった北九州芸術劇場に初登場します。

社会における不可触なタブーや性をめぐる矛盾を、批評的ユーモアを交えながら大胆かつ繊細に問う本作品は、今を生きる私たちに何を見せてくれるのでしょうか。

市原佐都子さんに「Q（クエスチョン）」を投げかけてみました。

取材・文／重岡 美千代

「かわいい」って実はしたたかで、
強くて、一種の生存戦略かもしれない。

Q 起点の一つになったのは一冊の本。「性売買のブラックホール（シンバク・ジニョン著）」との出会いをきっかけに、韓国でフィールドリサーチを行ったという市原さん。その時、何が目に留まり、どのように構想を深めていったのでしょうか？

市原 韓国では、今も残る性売買が行われているエリアに行き、そこで働いている人やアクティビズムに携わる人に会って話を聞きました。当然ながらいろんな立場があって、働く人の権利や事情もあれば、性売買は性的虐待だから保護しなければと活動する人もいます。どちらが正しいとか正しくないとか、そういう問題じゃないからこそ難しい。そんな中で印象的だったのが、いろんなところに有名な白い猫のキャラクターがいたことだったんです。看板だったり、部屋のカーテンだったり。日本から世界中に流通しているキャラクターが、こういう世界をただ見ている。「かわいい」を象徴するキャラクターの視点から、資本主義社会や家父長制を描いてみたらどうだろう、と思いました。「かわいい」って弱いものや底護を必要とするものという印象があるかもしれないませんが、それを武器にして自分の身を守っている風にも見える。「かわいい」というのは、実はしたたかで、強くて、一種の生存戦略かもしれない、と構想が広がりました。

あと韓国で見た、肉屋では肉を照らし、性売買の場所では女性を照らしていた、赤いライトも印象に残っています。

敢えて本物からちょっとずらし、

違和感を残した不思議な世界。

Q 本作は、食卓のシーンから始まり、家庭、都市、そして宇宙へと視点が引き上げられる一方で、逆に私たちの日常の陰や自己の内奥に隠された「目を背けたい何か」が、表層にすり替わるような不思議な感覚を覚えます。戯曲を構成、演出する中で意識されていることはありますか？

市原 今回は、「ねこ」という登場人物を日本と香港の3人の俳優が演じています。一つのキャラクターを複数人で演じるにあたって、国や持ち主に

よって異なる人格を投影するキャラクターの特性をどう表現するかと考えました。ここでヒントになったのは、インドネシアのナイトマーケットで売られていた偽物のキャラクターグッズです。そのキャラクターのいいところだけを抽出して組み合わせた結果、ちょっと変なものになって売られている。それが生成AIのようにも感じられて面白かったです。これだけグローバルな世界になって、AIも出てきて、今や一人の確固たる個性なんてあるのかなのか、どんなわからなくなっています。ならば、一人一人がとも個性的な俳優たちを、舞台上で敢えて偽物のキャラクターのように本物から少しずれた状態に置いてみたら、と思っただけです。たとえば、セリフは俳優の声をサンプリングしたAIボイスに読ませたり。俳優の身体の動きをモーションキャプチャーで回収して、それを敢えてちょっとずらした動きに変えたものを、再度俳優がなぞるというやり方で構築したり。声も身体も、もとは俳優自身から出てきたものですが、ちょっと奇妙な偽物の状態になっている。音楽は荒木優光さん、衣裳は「お寿司」の南野詩恵さんという気鋭のアーティストに参画してもらいながら、びったり合っているというよりもどこか違和感を残すようにしました。



演劇という虚構の中で、

どうリアルな感覚を与えられるか。

Q 作中では家父長制やジェンダー規範、資本主義を巡る大量生産／大量消費や労働のあり方など、現代社会の不条理がちりばめられている一方で、そこで生きるしかない人間のリアルな本性を独自のユーモアをもってすくい上げているように感じます。市原さんにとっての演劇、そして作品づくりとは？

市原 演劇って、いろんな作品があっという間と思うんです。ただ私は、作品を観た時に不快になったり、考えさせられたりしながらも、もう少し深いところで感情を解放していくのが芸術の役割だと思っっているの。で、そういう視点も浸透するいいなと思っています。作品づくりとしては、自分が日常の中で感じていることや言えなかったことを、できるだけ実感の持てるものにしたいという思いがあります。

大学時代は俳優になりましたたのでいろんな芝居にも出ていたんですが、普通のリアリティな会話劇にどうしても引かかっちゃう俳優だったんですね。「こんな会話しないし」って（苦笑）。そこで自分の中のリアルを模索するうちに、今のような表現になってきたのかもしれない。私の作品づくりにおいては、まずテキストを時間をかけて書きます。しかし、それをそのままやるのではなく、言葉や設定、身体表現を使って、どうリアルな感覚をお客さんに与えられるか



と考えます。最近では、自分のことだけを書くよりも、社会にある何か関連したもの結びつけた方がお客さんにわかってもらえやすいのかも、と思うようになりました。

今回の作品では、「ねこ」を媒介にして資本主義や家父長制などの社会を描く。主役は「ねこ」ですが、ねこの家族は、お父さんが強く、肉をすくく食べる。言葉のレベルでも「肉欲」など肉は性に結び付いています。家父長的で男性が女性を支配する世界にねこは抵抗感を持ちながらそれに翻弄されています。そんな舞台を観たお客さんがそれぞれの日常生活に持ち帰った時に、ふと何か喚起されるものがあればいいなと思っています。

現代演劇というものに初めて触れた

北九州芸術劇場での公演に向けて。

Q 大阪で生まれ、3歳から18歳までを北九州市で過ごした市原さん。12歳までクラシックバレエを習い、中学卒業後はバレエや日本舞踊、演劇の授業がある高校に進学。地元の演劇人との関わりも生まれ、北九州芸術劇場では2007年のシアターラボをはじめ、さまざまな事業に参加してくださっていた時期もありました。市原さんにとっての北九州とは？

市原 私が現代演劇というものに初めて触れたのも北九州芸術劇場でしたし、演劇を学ぶために桜美林大学を選んだり、今の仕事につながるきっかけになった場所です。そこで公演できるなんて当時の自分が知ったら……と思うと感慨深いですよ（笑）。北九州芸術劇場

場の企画に参加することは、家族以外の大人に出会えた点が大きかったと思います。やりたいことに一生懸命で、一つの作品を創ることに真摯に向き合っている大人の姿は、高校生の目には単純にかっこよく見えましたから。

その土地の観客の持つローカル性と

作品が出合う時に何が生まれるか。

Q 2025年京都での初演をはじめ、東京や海外のフェスティバルでも上演され、今年9月から岡山、豊岡、北九州、那覇、札幌と国内ツアーが展開される「市原佐都子／Q『キティ』」。これまで、それぞれの都市や町で観客の反応はどうでしたか？

市原 日本では静かに観る人が多い印象でしょうか。東京のフェスティバルで上演した時は、良くも悪くも現代演劇に慣れている人が来ていたからか、「すごく面白かった！」と何かを受け取っている感じの人が増えていたように思います。海外のフェスティバルでは、笑ったり、拍手したり、とにかく観客の反応が大きかったですね。作中にある家父長的で資本主義的な社会の中での「かわいい」という生存戦略を、ヨーロッパの観客はもっと虚構のものとして距離を持って観ており、むしろ演出の手法などに注目して楽しんでいるように感じました。日本の観客の方が「かわいい」の中にある切実さは身近に感じられるのではないかと思います。日本で女性のお客さんに、「会社ではこういう理不尽なことがあったけど、お芝居を観て気持ちいいスツとした」「同じ女性ががんばってる姿にすごく勇気もらえた」と言ってもらえたこともあって、それはとても嬉しかったです。

私は公演先に合わせて作品を変えることはありません。海外での倫理的に敏感になるポイントのずれが生じた場合は話し合いの末に変更を加えることもあります。したが、基本的には自分のローカル性を大事にします。私は東京を拠点に活動していますが、それも一つのローカルな立場です。そのローカル性を持ったまま各地へ行くことで、私の作品が少し珍しいものとして受け取られることもあるでしょう。私の持つローカル性と、その土地の観客が持つローカル性が出合う時、どんな見え方や受け取り方が生まれるのか。それを私自身楽しみにしていますし、観客の方もそのような面を含めて楽しんでいただければと思います。

●市原佐都子プロフィール

劇作家・演出家・小説家・城崎国際アートセンター芸術監督。2011年よりQ始動。人間の行動や身体にまつわる生理、その違和感を独自の言語センスと身体感覚で捉えた創作、演出を行う。2019年『パッコスの信女―ホルスタインの雌』をあいとりエンナーレにて初演。同作にて第64回岸田國土戯曲賞受賞。2023年『弱法師』を世界演劇祭（ドイツ）にて初演。高知・豊岡・東京を巡演後、2024年にフェスティバル・ドートンヌ・ア・パリ他で上演。2025年ローマシアター京都「レバトリの創造」にて『キティ』初演。同年、チューリヒ市立劇場にて『パッコスの信女―ホルスタインの雌』のリクイエーション作品『Holstein Milchkuhe』を初演。

●公演情報 市原佐都子／Q「キティ」

9月26日（土）14時／J:COM 北九州芸術劇場 中劇場

【作・演出】市原佐都子

【音楽・サウンドデザイン】荒木優光

【衣裳】南野詩恵（お寿司）

【出演】バーディ・ウォン・チンヤン（Artocrite Theater）、永山由里恵（青年団）、中西星羅、花本ゆか（はなもとゆか×マツキモエ）

▶公演詳細



▶チケット購入QRコード



チケット
好評発売中！

